

Die Eiche

ディ アイヘ
<http://www.jdg-chiba.com>



Japanisch-Deutsche Gesellschaft
der Präfektur Chiba
〒274-0822 船橋市飯山満町 2-518-1
清和会第2ワールドナースィングホーム内
電話 047-461-9111 Fax 047-461-7010

「世界平和」へ 思いを新たに 2017 ドイツ軍人慰霊祭

当協会主催の第23回ドイツ軍人慰霊祭が
11月19日、船橋市習志野霊園で実施された。
気温9.6℃、寒風が吹く中、ドイツ大使館の
マティアス・ライボルト武官（陸軍大佐）、
アンケ夫人ら来賓、会員41人など百人を超

える参列者を迎えて午前11時、始まった。黙祷に続き、山岡健先生が指揮する県立千葉女子高生45人によるオーケストラ部の演奏と習志野第九合唱団員19人のドイツ国歌が霊園に流れた。

金谷誠一郎会長は追悼の辞で、慰霊祭の歴史的背景とその後の日独文化交流について述べた後「戦争のもたらす悲劇を考えると、全世界の平和を祈らざるを得ない」と強調した。



ライボルト大佐は、ドイツ語と日本語で「毎年、皆さんとこの慰霊祭を行うことができるのは誇りです」とスピーチを始めた。「ドイツでは、この11月の第3日曜日にフランス、

ロシア、アフリカなどの戦死者を追悼する日です。慰霊碑に花輪を置く時に、二度と戦争はしてはならないという警告を思い起します」と述べた。大佐は「われわれが亡くなった人々

＜ライボルト夫妻＞に思いを寄せる際に平和の尊さを改めて意識することは義務です」と語り掛けて、
“pflichten”という言葉で締めくくったのが印象的だった。

来賓の船橋市の林貢作・市長公室長、諏訪晴信・習志野市副市長の挨拶の後、橋口副会長が習志野俘虜収容所で逝ったドイツ軍人30人の名前一人ひとりを、心を込めて紹介していた。同女子高オーケストラと合唱団による軍人葬送歌“*Ich hatt' einen Kameraden*”が厳かに続いた。

最後に女子高生たちが奏でるベートーベンの交響曲第七番二楽章の哀愁を帯びた旋律が会場に流れる。ライボルト大佐が花輪を慰霊碑に捧げ、参列者が次々に白菊を献花した。

慰霊祭の後、霊園に隣接する陸上自衛隊第一空挺団で行われた直会^{なおりい}で、ライボルト大佐は第一次大戦終結から満100年にあたる来年の慰霊祭にハンス・カール・フォン・ヴェアテルン大使の参列を示唆し、ドイツ軍楽隊の参加も併せて検討中であることを明らかにし、注目された。

‘18 慰霊祭
ヴェアテルン大使の参列
ライボルト大佐 示唆
第一次世界大戦終結100年で

記事中の来賓以外の主な参列者：中道尉・陸上自衛隊第一空挺団広報室長、小野浩文・千葉県国際課国際交流友好室長、加藤由恵・同室副主査



＜慰霊祭後、参列者で記念撮影＞



＜千葉女子高の皆さん＞

(編集委員 勝見 浩明)

[直会の席で、舟田詠子氏が明らかにした第一次世界大戦の「仮想博物館」構想は2面に]



**習志野俘虜収容所を世界にアピールを
2018 年開設の仮想博物館
舟田詠子氏 構想を語る**

**第一次世界大戦
終結 100 年記念**

ウィーン在住で、「社団法人・ヴァーチャル第一次世界大戦博物館」の事務局長、舟田詠子氏＝写真下＝が 11 月 19 日の当協会主催「ドイツ軍人慰霊祭」とその後の直会に出席し、「第一次世界大戦がどういうものだったか」を知ってもらうサイトの計画を明らかにした。欧州、日本の学術研究者などボランティアの専門家約 40 人が加わり、写真、兵士たちの手紙などさまざまな史料で世界的な規模の展示と発信をめざすという。計画の概要は下段の通りだが、使用言語は日本語、英語、ドイツ語の三か国語。

大戦勃発 100 年の 2014 年にウィーンで展覧会が催されたが、17 万人が足を運んだ。舟田さんは「欧州の人たちにとって大戦は『昨日のこと』なのです」と話す。ドイツやオーストリアなどでは、曾お祖父さんたちの戦場における写真や書簡などがネットオークションで盛んに売買されているという。舟田さんもこのオークションで、青島で捕虜となり習志野収容所で過ごした水兵の写真、手紙を入手し、その曾孫と連絡を取り合っているという。

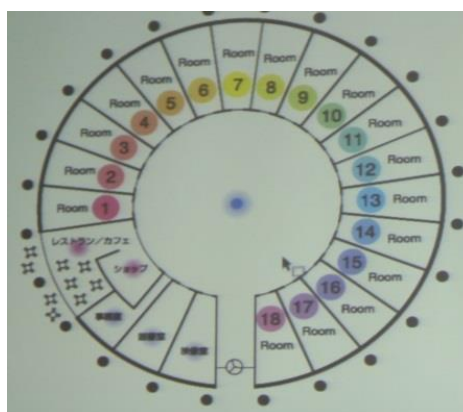


舟田さんの婚家の曾祖父が習志野収容所長、西郷寅太郎と同時期にプロイセン・ポツダムの陸軍士官学校に居た縁もあり「習志野俘虜収容所への関心が一層高まった」「ドイツ軍人慰霊祭に参加させていただき、深く感動しました」とも述べて、博物館の展示に取り組む決意を披露していた。

**第一次世界大戦
Virtual 博物館構想**

パソコン、アイパッド、アイフォンなどを対象に、映像を立体的（3D）に見せる仮想博物館。

“観客”は URL で、画面の地球儀をクリックし、博物館に入る。図 A の円形の展示室が並ぶ。その内容は図 B の Room 1～18、映像室などテーマごとに展示室が並び、好きな室に入る仕組である。



<図 A 上： 図 B 右>

Room 1	現代の中東危機
" 2	帝国と大国
" 3	第一次世界大戦一歓喜と悲慘
" 4	大国の植民地、保護領の戦争
" 5	海の戦争
" 6	陸の戦争
" 7	航空機の視界一空の戦争
" 8	戦争捕虜
" 9	外の敵と内の敵、家を追われた人々
" 10	死傷者、看護
" 11	女たちの戦争
" 12	子どもたちの戦争
" 13	転換期
" 14	平和なき終戦
" 15	休戦後の世界
" 16	激選の記憶
" 17	中学生の部屋
" 18	受験地獄
映像室	
図書室	
以下、略	

Room 1 の「現代の中東危機の舞台」。第一次世界大戦時の大国間の密約で国土の分割が行なわれ、シリア、クルドなど今日の紛争の元を探る。Room 3 は「第一次世界大戦一歓喜と悲慘」。オーストリア国民は歓喜をもって大戦を迎えた。7 月に始まった戦争が X マスの頃には敵をやっつけて帰ってくる、と。それが悲慘な結末になった現実を。Room 4 は「大国の植民地、保護領の戦争」。イギリス、ドイツ帝国の植民地はインド、中国、ニュージーランドなどは本国側と一緒に戦った。その実態。

Room 8「戦争捕虜」では、習志野俘虜収容所がテーマになる。

あまり知られていないが、ドイツに捕虜になった日本人もいるし、世界中の捕虜の扱いもこの部屋で展開する。Room 12「子どもたちの戦争」では、15 歳で戦場に行った 25 万人のイギリスの少年兵や子どもたちが描いた絵から「子どもたちが見た戦争」を。Room 14 の「平和なき終戦」では、「大戦は 1918 年に終わったわけではない」という人が欧州ではまだ、いる。その議論の内容を。Room 18「受験地獄」は、入室者が質問に答えられない場合はもう一度、関係 Room に戻って学び直してもらう。記述式、マークシート方式など国により異なる試験問題、戦争をめぐる各国の教科書の内容についても展示する。（編集委員 田中 正延）



忘れ得ぬドイツ人 強烈な葉巻と大きな獵犬



田草川 敏郎

「あなたもやりませんか」。南ドイツ・ニュルンベルクの北西にあるエアランゲンの社長室で私は出迎えた社長にいきなり、葉巻を勧められた。その日午前、実務スタッフとの話を終え社長室に招かれた時である。独特な強い匂いが立ち込める。壁には鹿や熊の首が5つ、6つ。重たそうな獵銃が10丁ほども掛かっていた。190cmをゆうに超えるとみえる社長。ハンティングが趣味だと言い、葉巻を器用に指に挟んでふかし続けている。もう一度「どうですか、あなたも」。普通のタバコもたしまない私が丁重に断わると「それではお土産に一本どうぞ」。

腰かけているソファも超ビッグサイズ。深く座ろうとすれば足が完全に浮く。右のひじ掛けに手を置くと、左手がひじ掛けに届かない。お尻をちょこんとソファの先端に乗せるだけだった。



エアランゲンの街



1977年、私にとっては初めての海外出張だった。ドイツ語はまるでダメ。あまり自信のない英語が頼りの一人旅。商談が終わると、今度はランチに誘われた。社長行きつけのローカル色豊かなレストランへ。ハンティング用の頑丈なトラックに乗る。異様な雰囲気振り返ると、大きな黒い獵犬がこちらをじっと見ている。時折、低い唸声がする。「とてもおとなしい犬だから、大丈夫」と社長は言うが、これまた落ち着かない。

あれから40年。最初はドイツのことは何も知らなかった。会社の「挨拶するだけだ」を真に受けての出張だった。エアランゲンの会社は「輸液」を専門とするローカルカンパニーだった。輸液は主に手術などの輸血に使う血液のようなもので、私たちが開発した高分子輸液をドイツやヨーロッパ各地で売り込みたかった。社長の英語も流暢とはいえず、日本人とは初めてだという話はとんとん拍子に進んだ。社長はドイツ政府の認可も得て、私たちの製品を大いに売ってくれた。市場の評判も良く、欧州の展開も順調にいった。

社長の会社は20年くらい前に大手企業に買収されてなくなったが、製品はまだ、ドイツや欧州市場にある筈だ。

その後、ビジネスでドイツを何度か訪れたが、議論好きなスマートな人たちが多かった。葉巻と大きな黒い獵犬。あの社長のようなドイツ人にはまだ、お目にかかっていない。

出版



著者は、横浜日独協会理事で慶應義塾大学名誉教授。長年日本文学の研究に従事してきた。これまでの研究が一区切りついたことをきっかけに「海外における日本文化」をテーマに世界各地を歩きながら調査研究に取り組んでいる。

本書で扱われている内容は、ケンペル、シーボルトにはじまる日独交流前史から、マンガ、アニメなどの現代文化、茶道、生け花、日本庭園などの伝統文化、日本美術、俳句、日本文学の移入、日本語教育と日本学等々多岐にわたる。日本文化と関わるさまざまな施設や機関を訪問し、日本文化普及に携る大学教授など数百人の現地関係者と懇談を重ね、日本の文化がドイツでどのように受け入れられているかを解き明かしている。個々の分野には多くの優れた文献があるが、ドイツに渡った日本文化全体を幅広く論じた書物はこれまでなかったように思われる。ぜひ多くの方々に手に取っていただきたい本である。

(編集委員会 木戸 裕)

B6版 240頁 2,000円＋税
明石書店 2017年10月発行

新春講演会

演題:「在外日本関連資料調査の現状と課題 — シーボルト・コレクションを中心に —」

講師は、国立歴史民俗博物館館長、久留島浩氏 (写真)



2018 年の当協会主催の「新春講演会」は 2 月 10 日 (土) 午後 3 時から、船橋市中央公民館＝同市本町 2-2-5 ☎ 047-434-5551 で開かれる (詳細は同封のチラシ参照)。

久留島館長は「国立歴史民俗博物館では、10 年以上にわたって、主にドイツにあるシーボルト父子関係資料の調査を行なってきました。その調査の状況と成果としての企画展示『よみがえれ！シーボルトの日本博物館』や出版物の概要について、また今後の計画についてもお話しをします」と、述べている。

久留島 浩氏 【略歴】: 1983 年東京大学大学院博士課程単位取得退学。同文学部助手、千葉大学教育学部助教授、国立歴史民俗博物館助教授、教授を経て、2014 年 4 月から現職。2002 年博士 (文学)。専門は日本近世史で江戸幕府直轄地 (幕領) の村落を中心に研究し、19 世紀の地域社会がいかなる意味で日本の近代社会を準備したのかについて考えてきた。 (『近世幕領の行政と組合村』東京大学出版会、2002 年)。旧家に残る史料を調査・研究し、多くの自治体史編纂に関わり、地域社会が変質・解体するなかで、地域に残る歴史資料の保存・活用についても大きな関心を持つ。同時に、地域社会のなかで歴史民俗系博物館が果たすべき役割や、博物館における表象の問題を歴史展示に関わらせて検討してきた。 (『異文化』を展示すること・『自文化』を展示すること)『国立歴史民俗博物館研究報告』140 号、2008 年)。著書は『描かれた行列—武士・異国・祭礼—』東京大学出版会、2015 年など。

ベルリン&東部ドイツ都市巡り
“M.ルターとエルベ”
2018 年ドイツ旅行概要固まる



協会主催の'18 ドイツ旅行の概要は次の通り。

◇時期: 5 月 25 日 (土) から 7 泊 9 日

◇主な訪問都市: デュッセルドルフ (日本デー参加と周辺観光を選択) - ベルリン - ポツダム-ルターのヴィッテンベルク城の教会・写真上 - ライプチヒ - マイセン - ドレスデンなど

◇旅費: 1 人・328,000 円 (参加者 25 人・予定)。

1 人部屋追加料金同 38,000 円。応募〆切は 1 月 20 日 (土)。応募者 25 人未満は中止も。

◇問合せ&申込: 橋口昭八 ☎ 047-449-0878 E-mail:

s.hashi@ae.auone-net.jp / 吉川三朗 ☎ 047-449-4752 E-mail: yoshikawa-s@jcom.zaq.ne.jp

運営委から

◇新運営委員決まる: 勝見浩明、志賀久徳、本間実里。
(敬称略、以下同じ)

◇Die Eiche 新編集委員決まる: 勝見浩明、木戸裕、本間実里の 3 人が加わり、志賀久徳、田中正延の 5 人体制となる。

◇菩提樹委員会設置: 日独修好通商条約 150 年を記念してドイツ大使館から菩提樹が寄贈され、千葉県内に 30 本が植樹されてから 6 年。植樹先が変わったり、生育状態もさまざまであるため協会として改めて調査し直したうえ、対策を講じる。
キャップは橋口昭八、委員は北村侑三郎他。

新入会員紹介

◇室田 真由美 (47)
＝千葉市稲毛区 (敬称略)



◆第40回記念 習志野第九演奏会

習志野第九合唱団/ 習志野フィルハーモニー管弦楽団

12/24	日曜	14時開演	習志野文化ホール	曲目: [第一部] 聖夜に贈るクリスマス名曲集/ 神の御子は
今宵しも/ オー・ホーリーナイト/ ヘンデル作曲ハレルヤ 指揮・黒岩英臣 [第二部]				ベートーベン作曲 交響曲第 9 番合唱付 指揮・黒岩英臣 ソロ: S 田井中悠美 Ms 山下裕賀
T 宮下大器 B 山田大智: S 席 2500 円 A 席 2000 円 B 席 1500 円 同ホール、ネットで/ 当協会等後援				

編集後記

◇今年もあと僅かです。Die Zeit fliegt. Die Zeit vergeht. おぼろげなドイツ語が浮かびます。同時に Die Zeit kehrt nicht zurück. でもあります。いたずらに時だけが経つ感じですが、2018 年は第一次世界大戦終結 100 年。欧州では“過ぎ去ったテーマ”ではない、と。舟田詠子氏の構想は興味深い。この大戦は、協会が主催している「ドイツ軍人慰霊祭」の原点であり、ボトルシップ研究会の主要課題でもあります。会員の皆さんと、協会としての企画を考えたいものです◇Die Eiche の編集委員会は新しいスタッフを得て心機一転です。誌面充実を図るよう努めたいと思います。会員のご支援、ご協力をお願いします。(M.T.)